

## プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

1/8

## “炎のコバケン”が贈る、新年を祝うオーケストラの調べ

今回の「平日の午後のコンサート」は〈ザ・コバケンⅡ〉。昨年11月の「休日の午後のコンサート」の〈ザ・コバケンI〉に続いて、円熟を極める“炎のマエストロ”が、オーケストラ音楽の醍醐味を堪能させてくれます。

〈平日の午後のニューイヤー〉とも題された今回は、それに相応しく、ウィンナ・ワルツやポルカの人気上位曲が並んでいます。しかしその中にチェコの作曲家スメタナの「モルダウ」が含まれているのが特徴的。オーストリアとチェコは隣同士でもありますが、モルダウ川とドナウ川の源流の1つは国境付近の岩から流れ出た同じ水で、それが分水嶺によって二方向に進みます。つまり「モルダウ」と『美しく青きドナウ』は、“川つながり”であり、二国の“音楽の象徴つながり”でもあります。通常のニューイヤーにはないこの発想は、チェコにゆかりが深いコバケンならではのといえるでしょう。

では、新春の晴れやかな気分の中、優雅で華やかな音楽に浸りましょう。

1/8

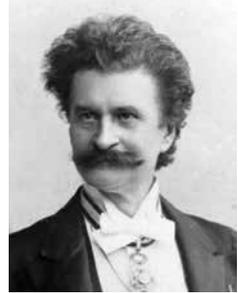


2018年11月4日「休日の午後のコンサート」より

©上野隆文

## “ワルツの父”の息子、“ワルツ王”ヨハン・シュトラウスⅡ世

幕開けは、ヨハン・シュトラウスⅡ世(1825-1899)の『皇帝円舞曲』。ウィンナ・ワルツの創始者の一人、ヨハン・シュトラウスⅠ世の長男に生まれたシュトラウスⅡ世は、父の死後その楽団を吸収し、長年“ワルツ王”として君臨しました。作品番号の付いた479曲のワルツやポルカ、『こもり』をはじめとするオペレッタなど、残した作品は500曲以上。国外公演もたびたび行って人気を博しました。



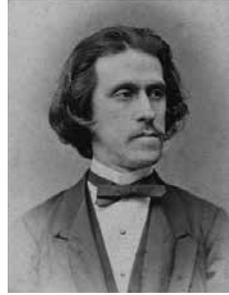
ヨハン・シュトラウスⅡ世  
(1825-1899)

『皇帝円舞曲』は彼の有名曲の中で最もシンフォニックな作品。1889年、オーストリアとドイツの同盟締結を機に作曲され、同年10月ベルリンにて、作曲者指揮する約100人のオーケストラにより初演されました。当初は「手に手をとって」という友好的な題名だったのですが、出版の際に改名。楽譜にはオーストリアのハプスブルグ家の紋章を印刷して愛国心を示すという、したたかな経緯をもった作品でもあります。曲は遅い行進曲で開始。主部に入るとそれぞれ2部分からなる4つのワルツが続き、コーダ(結尾部)にもワルツの一部が再登場します。全体に大型で、「円舞曲」という古い呼び名が似合う堂々たる音楽です。なお、序奏～3つから5つのワルツ～コーダは、ウィンナ・ワルツの定型です。

## シュトラウス兄弟の合作、ピツィカート・ポルカ

おつぎは、ヨーゼフ&ヨハン・シュトラウスⅡ世の『ピツィカート・ポルカ』。シュトラウスⅡ世は、一時期ロシアの鉄道会社とタイアップして、ペテルブルグ近郊のパヴロフスクで毎夏公演を行っていました。この曲は、1869年の同公演のために、弟ヨーゼフ・シュトラウス(1827-1870)との合作で

生み出された作品です。曲は、弦を指ではじくピツィカートだけで奏される遅めのポルカ。兄が発案したとされるその斬新なアイデアが受けて、初演当初から高い人気を獲得しました。なおヨーゼフは、病気の兄の代役を機に技師から転身し、早世しながらも、兄以上と賞された才能を生かして約300曲の作品を残しました。



ヨーゼフ・シュトラウス  
(1827-1870)

## 人気オペレッタ作家 レハールの出世作、ワルツ『金と銀』

代わって、フランツ・レハール(1870-1948)のワルツ『金と銀』。ハンガリー生まれのレハールは、シュトラウスⅡ世の次の世代を代表するオペレッタ作曲家としてウィーンで活躍し、『メリー・ウイドウ』『微笑みの国』等の名作で人気を集めました。1899年作(1902年作との説もあり)のこの曲は、メッテルニヒ侯爵夫人パウリーネが主催する「金と銀」をテーマにした舞踏会(会場は金色と銀色で飾られたといいます)のために作曲されたワルツ。若きレハールの名を世に広め、オペレッタ作家への道を開いた作品でもあります。ハーブで始まる愛らしい序奏に、美しいメロディをもつ3つのワルツが続き、勇ましい音楽で締めくくられます。

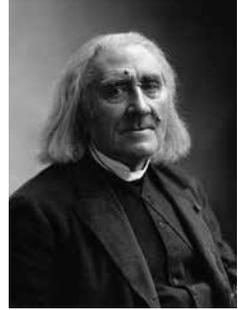


フランツ・レハール  
(1870-1948)

続いては、J.シュトラウスⅡ世のポルカ『雷鳴と稲妻』。1868年2月、芸術家協会「ヘスペルス(宵の明星)」の舞踏会のために書かれた快速ポルカです。三部構成の中に4つの旋律が登場し、大太鼓とシンバルが雷鳴と稲妻を模倣します。この楽しい曲は、オペレッタ『こうもり』の劇中に挿入されるケースが多く、また日本では運動会を思い出される方も少なくないでしょう。

## 大作曲家リストとの交歓が生んだワルツ『春の声』

前半最後は、J.シュトラウスⅡ世のワルツ『春の声』。1883年2月、オペレッタを指揮するためにブダペストを訪れていたシュトラウスⅡ世は、とある晩餐会で旧知の作曲家フランツ・リストと同席します。本作は、その余興で71歳のリストがピアノ、58歳のシュトラウスⅡ世がヴァイオリンを弾き、即興のやりとりをする内に出来上がったといわれています。彼はウィーンに戻った後、オーケストラ曲として完成。さらに歌詞も付けられ、同年3月に初演されました。なお現在では歌付き歌なし両方の形で愛されています。曲は、通常置かれる序奏部がなく、ごく短い前奏後すぐに第1ワルツが登場します。比較的珍しいこの形は本作の大きな特徴。全体は、3つのワルツと第1ワルツが再現されるコーダから成っており、幸福感に充ち溢れた、新春にピッタリの音楽が展開されます。



ナダールによる晩年のフランツ・リスト(1811-1886)

## “チェコ国民主義音楽の祖”スメタナの代表作「モルダウ」

後半最初は、“チェコ国民主義音楽の祖”ベドルジーク・スメタナ(1824-1884)の連作交響詩『わが祖国』より「モルダウ」が演奏されます。スメタナは、歌劇『売られた花嫁』で成功後、聴覚を失う悲劇に見舞われながらも、1874～79年にチェコの歴史や自然を描いた全6曲の交響詩『わが祖国』を作曲。この作品は、当時オーストリアに支配されていたチェコの国民愛を高め、同国の象徴というべき存在となりました。



ベドルジーク・スメタナ(1824-1884)

その第2曲「モルダウ」は中でも有名な1曲。チェコのボヘミア地方の中心を流れるモルダウ川(これはドイツ語名で、チェコ語ではヴルタヴァ)の流れや周辺の情景が音で表わされます。まず2本のフルートで源流が示され、クラリネットによるもうひとつの流れと合わさって川になります。ヴァイオリン等が奏でるなめらかな旋律(メインテーマ)が川となって流れ出す場面。続いて、森の狩(ホルンが角笛を表現)、田舎の踊り(楽しく弾んだ部分)、月の光と妖精の舞い(夢見るような遅い部分)、聖ヨハネの急流(テーマが戻った後、突然激しくなる部分)、プラハ市内(テーマが明るく奏される部分)、ヴィシェフラド(プラハの城。最後の堂々とした部分)と場面を変えながら、モルダウは川幅を増していきます。

## ウィンナ・ワルツの代名詞『美しく青きドナウ』

締めくくりは、J.シュトラウスⅡ世のワルツ『美しく青きドナウ』。ウィンナ・ワルツの代名詞であり、オーストリアの第2国歌ともいえる名作です。1867年、プロシャとの戦いに敗れたオーストリア＝ハプスブルク帝国の沈滞ムードを回復するため、ウィーン男声合唱協会の指揮者ヘルベック(シューベルト『未完成』交響曲の楽譜の発見者でもあります)の依頼で作曲されました。当初はドナウとは直接関係のない歌詞が付いた男声合唱曲でしたが、約1ヶ月後、現行の管弦楽版に変えて大ヒットしました。曲は、弦のトレモロが印象的な序奏から、5つのワルツを経て長いコーダに至る、優雅きわまらない音楽です。

しばたかつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。